

私たちはこの大斎節の間、毎週日曜日の礼拝、聖餐式について学びを深め、主日礼拝を一層豊かなものにしていこうとしております。聖餐式は全体を2つに分けることが出来ます。前半が171ページまで、後半が聖餐と書かれている以降の部分です。聖餐式は大きくこの二部で構成されています。前半は、聖書の御言葉を中心とした部分であることから、御言葉の部分、あるいは御言葉の祭り、後半が聖餐ということになります。

162ページから始まります聖餐式は「主イエス・キリストよ、おいでください。弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現されたように、わたしたちのうちにもお臨みください」という言葉で始まります。これは聖餐式の真の司式者は主イエスであることを現しています。司祭は主イエスの役割をこの世的に現す存在であり、いわば黒子の役割を担っているのです。主イエスが十字架の死を遂げて墓に葬られました。ところが三日の後主イエスの体が墓には見当たりませんでした。主イエスは復活されたのです。弟子たちは、自分たちが主イエスの体を盗んだのではないかと疑いをかけられるのを恐れて、戸に固く鍵をかけ隠れていたのです。恐怖と恐れにおののく弟子たちのところへ復活の主イエスが姿を現しました。弟子たちはそれを見て喜び、主イエスと共にいた時の勇気と希望が再びわきあがってきたのでした。主イエスが真の司式者としてこの聖餐式に來られ、わたしたちの交わりに共にいてくださるようにとの挨拶の言葉が聖餐式の始まりなのです。

続いてささげられます祈りは、私たちの心を清め、という言葉が含まれていることから清めの祈りと呼ばれています。聖餐式に集うわたしたちの心が聖霊の働きによって清められますようにと、主イエスを迎えたわたしたちが、共にいるにふさわしいものとなるよう祈るのです。こうしてわたしたち自身の備えにかかわる祈りがささげられた後、感謝と賛美の部分が始まっていくのです。

感謝と賛美は、聖餐式において全体を担う重要な言葉です。主イエスの福音にもわたしたちは感謝で応えますし、後半の聖別祷もその主たる内容は、主イエスによってもたらされた救いの御業への感謝賛美です。聖餐式はいわば感謝賛美で始まり、感謝賛美で終わるといってよい礼拝です。こうしたことから聖餐式のことを近年、ユーカリストと呼ぶことが多くなりました。清めの祈りに続いて、栄光の歌または主よあわれみをお与えくださいがささげられます。主の栄光をあおぎ、わたしたちの上に主のあわれみが豊かに与えられますようにとの祈りです。キリエエレイソン、クリステエレイソンは新約聖書の原語でありますギリシャ語で、意味は同じです。聖餐式にはこのように言語をそのまま用いている言葉がいくつかあり、ホサナもその一つです。ちなみに祈りの最後にわたしたちが必ず用いますアーメンはヘブライ語で、どうぞそのとおりになりますようにとの意味です。こうしたことからわたしたちは祈りの最後に心と声を合わせてアーメンと唱えるわけです。

続きます大栄光の歌は、主イエスが生まれた時、その誕生を羊飼いたちに知らせた天使たちが、主なる神を賛美した言葉が冒頭に用いられています。「いと高きところには神に栄光」この言葉は実に、主イエスが誕生されたその時からわたしたちの賛美の言葉として親しまれ、用いられ続けてきたのです。わたしたちのささげる賛美の言葉としても、最もふさわしい祈りということが出来ましょう。

大栄光の歌に続いて特祷がささげられます。特祷は、その日曜日の主題を中心とした内容となっており、教会のカレンダーに従ってつくられています。わたしたちの教会にも教会のカレンダーがあり、教会暦と呼んでいます。本日は大斎節第2主日ではありますが、こうした名前や特祷、そして

旧約聖書、詩編、使徒書、福音書が合わせて決められています。教会暦は3年サイクルで成り立っており、それぞれをA年、B年、C年と名づけて区別しています。本年はC年です。そしてその変わり目は1月1日ではなく、クリスマスの4つ前の日曜日を降臨節第一主日と定めて、この日を教会の新年としているのです。こういうわけでわたしたちの教会では、降臨節第一主日に、一年最初の日曜日ということで信徒総会を行っているわけです。

続いて御言葉の部分に入ります。文語の祈祷書だった当時、御言葉は使徒書と福音書でしたが、現在はそれに先立って旧約聖書が読まれます。生まれたての教会のことを初代教会あるいは原始教会と呼びますが、聖餐式はすでに初代教会からささげられていました。当日の礼拝の様子を詳しく記した書物にディダケというのがありますが、これによりますと聖餐式は、最初に聖書が読まれ、続いてその聖書に基づいた説教がなされて、続いて共にパンを裂いたと書かれています。当時まだ新約聖書はありませんので、読まれた聖書とは当然旧約聖書ということになります。ところが文語当時は、聖餐式において旧約聖書が読まれることはほんの僅か、使徒書に代えて若干読まれるのみだったのです。そこで現在の祈祷書からは初代教会の精神をもう一度回復してその御言葉を受け止めることが重要であるとのことで、旧約聖書を読むことが原則となったのです。また当時、旧約聖書朗読に続いて短い賛美の詩編を歌いまたは唱えることが常でありました。これは旧約聖書を読むようになった時点で一緒に行われるべきことでありましたが、用いる詩編の選定の都合で少々時間がかかり、整備されたのは昨年のごとくでした。当教会におきましても、昨年末より、信徒奉事者の方の先導で旧約聖書に続いて詩編を用いるようになったのはそのためです。

さらに復活節は、旧約聖書に代えて使徒言行録を読むようになっています。さらに旧約聖書に代えてシラ書など旧約聖書続編を用いることもあります。わたしたちの聖公会では、旧約聖書続編は信仰生活をおくる上で有益な書物であるが、ここからいかなる教えや教理を導くことをしないとしております。

こうしたことから皆様が聖書をお求めになることがありました場合は、どうぞ旧約聖書続編のある聖書をご用意いただきたいと思えます。表紙などに旧約聖書続編つきと書かれていますのですぐおわかりになると思えます。書店などではよく旧約聖書続編の含まれているものと含まれていないものが並んでおいてあることが多いのでご注意くださいと思えます。当然のことながら旧約聖書続編のない聖書のほうが、ページ数が少ない分お安くなっています。外観はほとんど変わりませんので安いほうにしようとお求めになったら、旧約聖書続編が含まれていなかったというケースをよく耳にいたしますので、ご注意くださいと思えます。

続いて使徒書が読まれます。使徒書は、主イエスのために働いた使徒聖パウロを始め多くの使徒たちが、教会およびキリスト者に対して書いたメッセージが内容となっています。新約聖書は、最初に福音書、そして使徒言行録、続いて使徒書という順番に納められておりますが、書かれたのは使徒書が最初で続いて福音書、ルカによる福音書の続編ということで使徒言行録が書かれました。そういうわけで主イエスの時代の最も近いのが使徒書です。ちなみに新約聖書の中で最も古く書かれたのがテサロニケの信徒への手紙1です。使徒書の内容は、教会やキリスト者への勧めや教えが中心となっていますが、わたしたちもまた、時代と距離を超えてそのメッセージに耳を傾けるのです。

こうして御言葉は、その中心となります福音書へと入ってまいります。今回は福音書からの学びをともにしてまいりましょう。